

日本の「友好の原点を歩く」訪中団、 ハルビン市及び方正県と友好交流

石 金楷

2008年7月9日、日本の「方正友好交流の会」事務局長・大類善啓氏を団長とする「友好の原点を歩く」訪中団一行17名は、ハルビンに到着。ハルビン市日本残留孤児養父母連合会の熱烈な歓迎を受けて、空港の入り口前で記念写真を撮った。訪中団一行は午前中に日本を発って大連に到着し、その後乗り継いでハルビンに着いた。連合会秘書長の私と残留婦人二世の牛世光は、連合会代表として空港に出向き日本の友人たちを迎えた。

7月10日午前8時、訪中団は友好交流のために方正県へ。方正県的高速道路の出口まで方正県外事弁主任の王偉新、李宝元などの方々が出迎えた。時はすでに正午、訪中団は旅の疲れも見せず、県政府へ表敬訪問に行き、県政府正門前で記念撮影を行った。続いて一行は、方正県烈士霊園を参拝し、大類善啓氏は訪中団を代表して革命烈士記念碑に花輪を献上した。訪中団全員は真剣に烈士霊園についての説明を聞き、碑文の前で写真を撮ったり、記録したりした。

<碑文> 抗日戦争、解放戦争、社会主義建設時期にあたって、祖国の独立、民族の解放、人民の幸福、国家を強大にするために、烈士たちは方正地区で次々と突進し、勇敢な闘争と崇高な精神が日月の光を奪い、偉大な功績が山川とともに残り、威風堂々とした心意気が千秋まで輝きを失わず、高く大きな徳行が万世まで伝えられる。我が方正人民は烈士の遺志を継承し、水を汲んで源流を偲び、革命精神を磨き、壮麗な山河を奮起建設し、碑誌を建てたことは、億万年も忘れないでおこう。

革命烈士永遠に不朽なれ

方正県人民政府一九八七年八月一日

烈士霊園を出て日本の友人たちは、車で方正県の中日友好園林に着き、日本人霊園及び中国養父母霊園を参拝し、悲愴かつ鄭重な表情で花輪と花束を献上。深く黙禱し、哀悼の意を表した。同行の日本の僧侶は合掌して、長時間読経し、亡霊の安息、養父母功德の永存、中日の永久友好、世界の永遠平和を祈念し続け、園林の中に存在する日本人公墓と養父母公墓に関して下記のように説明を受けた。

方正地区の日本人公墓は、1963年に周恩来総理の許可の下で建設され、中に5千体の日本開拓民の遺体が埋葬されている。麻山地区の日本人公墓は、1984年10月鶏西市からここへ移葬された。墓には500余りの麻山地区開拓団の女性と子供たちの遺骨が葬られている。中国養父母公墓は、1995年8月、1974年に方正県から日本へ定住した日本残留孤児遠藤勇氏の寄付により建てられ、養父母公墓入口の両側に“養育之恩、永世不忘”と大きく刻まれている。

中日友好園林を出た時にはすでに午後1時になっていたが、食事を後回しにして、吉興村に行った。吉興村はかつて紅部村と呼ばれたことがあったが、この名前にされたのは何故か？ 当時この村は日本開拓団の東北本部所在地だった。日本語発音のアクセントで中国語に翻訳すると、本部が紅部になり、村の名前も紅部村になった。吉興村には所帯数941、村民数3206人あり、メイン道路は細黄砂が敷かれ、両側に赤煉瓦の平屋が並ん

で、わずかながら粗末な土作りの藁ぶき屋根が見える。各家は大小さまざまな、長さの違う枝と板で遮断されている。藁ぶき屋根の中に当時日本開拓団員が住んだものがまだ残っていると聞いたが、60年の歳月による風化、及びその後の住民による修繕で、藁ぶき屋根の原貌も大きく変わって、かすかにまだ当時の日本式藁ぶきの跡が見える。村民たちは訪問者を見て、あちこちから集まって来た。日本の友人たちは村民たちと記念写真を撮り始めた。

吉興村から出てから急いで食事をして、訪中団一行は伊漢通埠頭を訪ねた。当時の日本開拓民たちの多くは、船で松花江に沿って方正に辿り着いた。日本の敗戦後に、わずかな日本人はここから船でハルビン市へ逃げ出したが、その後すぐ松花江をソ連赤軍に封鎖され、逃げられない人たちは方正県の砲台山の中に隠れた。一行は滔々と流れている川を眺めながら、兩岸に停泊している小船が目にとまり、昔を偲んで、感無量の様子だった。

午後4時、訪中団はハルビンへの帰途に着いた。途中で東京から来られた阿久津国秀さんは感想を語った。阿久津さんは幼少年時代を方正県で過ごされたが、数十年が過ぎ、方正県で起こった変化があまり大きくて、自分の故居はどうしても見つけることができなかった。ただここで中国人が建ててくれた日本人公墓を見られ、特殊な中日友好意義を持つ中日友好園林を見られ、非常に感動し、「今回の旅に参加した甲斐があった。日本に帰ったら、見聞したことを友人たちに紹介し、もっと多くの日本人に方正のこと、中日友好園林のことを知ってもらいたい」と語った。

7月11日午前、訪中団一行はハルビン731細菌部隊の遺跡を訪ね、日本語解説員の説明を聞きながら、各展示室を1個ずつ見て回り、真剣に解説を聞いた。細かく記録を取っている方も何人かいた。訪中団の方々にはここで、合計3000余りの人間が残忍な生体解剖と各種試験の対象として殺害されたことを知らされた時に、多くの方は悔恨の涙を流した。一部の遭難者の名前が刻まれている長い廊下に辿り着いた時、時間が止まったように、皆の足が重くなり、腰を曲げて、深々と遭難者に祈りを捧げた。外に出て、遺跡の広場に来て、近くにある、当時動力班が残したコンクリート残壁と煙突の残骸が青い空と白い雲の背景に映されて、目を刺すように痛々しく、当時のすべてをもの語っているように見えた。

731遺跡を出て、暫く人々は深い思索の中に浸っていた。私は大類善啓氏に何回も感想を聞きたいと思ったが、彼の深刻な目付きと、先ほど買ったばかりの2冊の731部隊の暴行を暴露する書籍をしっかりと抱えられた姿を見て、彼の心は今苦痛に包まれていることが分かり、彼は必ず中日両国人民が永久友好を保ち、歴史の悲劇が決して繰り返されないようにと考えていると思った。

当日午後、日本の友人たちは瀋陽へ行くため、別れる時が迫ってきた。筆者は連合会の代表として、中日友好の促進のために努力している訪中団のすべての方々に感謝の意を表し、次の旅のご無事を祈った。そして、連合会から全員に、中日友好園林の記念冊子及び記念写真を差し上げた。

編集部注：

<せききんかい氏は、ハルビン市日本残留孤児養父母連絡会秘書長。なお、ハルビン市養父母連絡会からは、当会に今までの活動に対して感謝状が贈られてきた>